

庭で踊る女の子（洲本市）

むかし、関左次兵衛〈せきさじへえ〉と妻との間に、かわいい女の子がいました。その夫婦は、大変その子をかわいがっていました。ところが、その女の子が、急に病気で死んでしまいました。

「あの子だけが、生きがかったのに。」

「どうして死んでしもたんやろ。」

関夫婦の悲しみは、たとえようもなく、毎日、泣き暮らしていました。

ある日、たそがれ時に、妻が縁側へ出てみると、庭でなにやら動くものがあります。よくみると、女の子が赤い手ぬぐいをかぶって、うたいながら、踊っているのです。

妻は、その子の顔を見てびっくりしました。それは、死んだはずのわが娘なのです。

急いで夫の左次兵衛に告げますと、左次兵衛もとんできて、「あっ！わが娘だ。」と叫びました。

「しかし…待てよ…。あの女の子は、顔かたちは、わが娘とそっくりだがどこかちがうぞ…。ありゃわが娘でないわい。」そう言って弓矢を持ってきました。

「やめてください。あれは、まちがいなくわが娘です。殺さないで…。」

妻は必死に止めようとしたのですが、夫は、「ちがう、ちがう、死んだ娘が生きかえるはずはない。何かか化けているのだ。」そう言って、夫は、妻の止めるのも聞かず、弓に矢をつがえ、踊っている女の子を射ました。

手ごたえがあったのか、「きゃん。」と鳴いて姿を消してしまいました。

「団次〈だんじ〉！団次！」

家来の団次をよんだ左次兵衛は、「庭から外へ、あれ、あのように血の跡がついている。あの血の跡を追ってみい。」と命じました。

団次が提灯〈ちょうちん〉をかざして血の跡を追っていきますと、堀端をとおって姥が淵〈うばがふち〉というところまで、点々と血の跡がついていました。姥が淵に穴があいていて、団次がその穴をのぞいてみますと、「あっ！たぬきだ。古だぬきだ。」思わず団次は叫びました。

古だぬきが、その胸に矢をさされて死んでいたのです。

